

「閉じた個という不合理——フッサールと西田における他性の謎」

田口 茂（北海道大学）

本提題では、個としての意識を閉じた領域のように捉える見方が実情に即していないということを現象学的分析を通じて示し、その結果、他者経験がどのように考えられるべきかについて考察する。その際、E・フッサール、西田幾多郎、E・レヴィナスの思想を参照することにした。

本提題ではまず、意識に境界がないという点を論ずる。何らかの仕方で境界を認識するとしたら、それもまた意識されているから、やはり意識はその境界を越えている。一見トリヴィアルにも見える論点だが、われわれはこの事実をどこまでも真に受けるべきだと考える。意識のもつこのような性格を、意識の非文脈的（non-contextual）な性格と呼びたい。

さて、意識そのものに境界がないという考えをどこまでも貫くとき、とりわけ問題になってくるのは「他者」である。意識に境界がないとすると、他者は私に対して境界の外にいるような仕方で「他」であるのではない。他者もまた、意識の内に現われてくる。しかしそれでも、他者はまさしく「他者として」現われている。境界のなさを「非文脈性」として解釈するなら、他者は一定の文脈のなかで他として位置づけられるのではなく、いわば「文脈なき他性」として意識内に露現すると言うべきである。

この他性をどう考えていくか。初期のフッサールは、「誰のものでもない意識」という無人称的意識の考えによって、この問題に対処しようとしている。しかし、その挫折を経て、後年のフッサールは、「原自我」の思想によってこの難問に答えようとした。つまり、他者と並列されるような私に先立つ「私」の経験の次元があり、そこで私は、私でありながら他者を排除するものではない。他者は「境界の外」からやってくるのではなく、むしろ私自身の中心に自らを告げるのである。

西田幾多郎もまた、この問題に早くから取り組んでいた。『善の研究』およびその関連草稿においては、個を超えた意識、個に先立つ経験について論じられている。だがそこでは、自他の区別があまりにも簡単に乗り越えられてしまっているようにも見える。他性の問題は、十分に究明されていない。西田が他性の問題に本格的に取り組むのは、後年の論文「私と汝」においてであろう。そこで西田は、「自己の底に絶対の他を見る」とか、「私の根柢に汝があり汝の根柢に私がある」という。そこでは明らかに、自己と他者が境界を接する二つの領域であるかのような表象が意図的に斥けられている。他者は私の只中に現われるのであって、この無媒介的な接触が他性を際立たせる。ここには、フッサールの言う「他性における合致」や、レヴィナスの「身代わり」にも通じる事象が見届けられていると言ってよいのではないか。

これらの哲学者の言明に耳を傾けながら、「私」の核心に自己を告げる他者と、それを受容する自己意識のあり方について、考察してみたい。